タイトル：『夢泳ぐ魚』

著者名：伽里野　凪　（かりの　なぎ）

文字数：4,985 文字

◆あらすじ◆

私は今夜も彼の機嫌を損ね不満を一身に浴びる。彼は私の抱えた問題には全く気が付いておらず、３０代の二人の未来は暗雲に包まれていた。彼が眠りについた後、異変は起きる。私は魚となり夜の街を泳いだのだ。美しいトロイメライの旋律と、幻想に導かれて心の求めるものに徐々に気がついてゆき…。

◆アピールポイント◆

【日常の中にある幻想】誰もがそういったものに少しずつ救われながら生きているのではないかと思い考えた物語です。

耳にした事が有る方が多いと思われる幻想的な曲と水や雨の情景は、映像になった場合には効果的に物語を観ている方の心へ届けてくれるのではないかと思っています。

「毛が長くて白い太った猫がね、いつも室外機の上で気持ちよさそうに寝てるんだよ。あそこ日向で温かいからかな。ふふふ、私その子に名前をつけたんだ。呼ぶと嬉しそうに返事して甘えてくるの。でもその子ってば、他の家では違う名前で呼ばれてて…」

ビールを飲みながら私の話をBGMに、スマートフォンを弄っていた彼はこう言った。

「もういいよ、その話。他に話すことないの？」

せめて嫌な気分にならない話を、と思ったのだが失敗だったようだ。浮かべた笑みは、まだ顔に張り付いている。私が答えにつまずいているとこう続けた。

「あーもういいや。俺、寝るわ。おまえはまだ寝ないの？」

どことなく『一緒に』という雰囲気を感じて反射的に視線をそらす。声色に注意しながら明るく答えた。

「うん。まだ眠くないから」

「おまえはいいよな。いつまでだって寝てられるし。てか、仕事ちゃんと探してるのかよ」

また失敗だ。でも思い通りにならなかった時点でどう答えても同じだったのだろう。彼は私がどうして仕事を続けられなくなったのかを知らない。多分聞くつもりもないだろう。そして私がいつの時間帯であっても、まとまった睡眠をとれない事も知らない。

「おまえってすぐ黙るよな。そのテンポじゃどこにいっても役に立たないよ。ぼーっとしてて さ、３０も過ぎたってのに、なんでそんな子供みたいなんだよ」

私のおっとりした雰囲気が好きだと言ってくれた彼はどこへ行ったのだろうか。

でも、そういうものなのかもしれない。私にも良くないところはあった。最初から『何か違う気がする』という違和感を感じていたのに付き合ってしまったのだ。『大切にする』そうはっきりと言ってくれた事が当時は嬉しかったから…。

あれから６年、３つ年上の彼は私との関係をどう思っているのか、未だ解らないままだ。

彼は帰宅し一日に起きた嫌だった事と、上司の愚痴をこぼした後、私への文句を一通り言い終えると隣室へ行き眠りにつく。私の借りた１LDKのマンションに彼が転がり込んできたのは５年程前の事だった。私は実家とは疎遠でこれといった理由は無いがもう４年は連絡をとっていない。兄弟姉妹はおらず、父は母が一番大切で、母は自分が一番大切な人だ。そんな私が彼には都合が良かったのだろう。狭いと文句をいいながらも引っ越しをする素振りは無かった。何にでも文句が言いたい人なのかもしれない。

彼が寝てしまうと他に行く場所も無くなり1月の終わりの夜を、私はダイニングキッチンで過ごす事となる。ダイニングキッチンとは名ばかりのその部屋は5畳程で、彼の寝ている居室兼寝室の部屋より狭かった。エアコンは隣室にしか無く、扉を少しだけ開けている。物音をたてないように注意しながら過ごしていると、締まりの悪い蛇口から零れる水の音と、隣室からのいびきだけがこの世界の音の全てになる。こんな夜にあの白く柔らかな猫がいてくれたら、どんなに温かで穏やかな気持ちになれるだろうか、私はそんな事を考えていた。

そんないつも通りの夜に、いつも通りではなくなっていく自分を感じたのは彼が寝てから1時間程経った頃だった。『このままでは溺れてしまう』急にそう感じたのだ。ダイニングテーブルを前に、椅子に座ったままの自分が部屋ごと水底に沈んでいくような感覚に陥る。沈む部屋からはぶくぶくと泡が浮いてゆき、私はもがく。部屋から出られない。私は狭いダイニングを何度も行ったり来たりした。

息苦しさはどんどんと増してゆき気がつけば奥歯をかみしめ、流れ落ちる涙を袖口でおさえていた。するとトイレの個室内の情景が浮かんでくる。以前勤めていた会社のトイレだ。あの時と似ているなと思った。泣いているのに悲しいという訳ではなく、自分がどんな感情を抱いているのか把握できないのだ。ただ頭の中だけが忙しく色々な事を考えている。結局あの日は職務室に戻る事が出来ず、荷物すら置いたまま徒歩で家へ帰った。あの時『ここには居たくない、外へ出たい』と思った気がする。私は次の日から仕事へ行けなくなった。数日後、這うようにして出社し退職届を提出した。

そして今も『外へ出たい』と感じている。その思いに気がつくと、堪える事が出来なかった。私は帽子を目深にかぶるとコートを掴んだ。『行こう』と決めると途端に水底が心地よく思えてきた。家を出る時、既に深夜1時をまわっていた。

私は都心のターミナル駅から一駅の街に住んでいた。深夜でも車の行き交う大通りへ出て、なんとなくターミナル駅を目指した。流れる車のライトは涙で滲んだ視界にとても綺麗に見える。木々をそよがせる風や、近づいては遠ざかる車の走行音は波のように私を撫でて

ゆく。『私は水の中にいるんだ』そう思うと、夜を泳ぐ魚になったように思えた。

思考の絶えない頭が、進む事しか考えられない魚の脳になるような、そんな速さで進み続けた。最初はもがいているようだったけれど、だんだんと水の流れに溶け込むように泳いでいた。いつの間にか涙は乾き、早くなる鼓動とは裏腹に息苦しさは消えていった。冷え切っていた身体の芯が熱を帯びるのを感じる。ターミナル駅に近づくと、眩しさに目を細めた。目がチカチカすると思いながら私は光の波の中も全力で泳ぎ続けた。

何か特別な物質で頭の中が満たされたのだろうか、全く疲れを感じなかった。私はターミナル駅の周辺をやみくもに泳ぎ回る。夜の街ですれ違う人々も魚のように見えてくる。いろんな色の夜の魚は皆、好き勝手に泳いでいる。『自分はどんな姿をしているのだろう？』そう思って確認すると私は全身が銀色の立派な姿をしていた。丸い小さな鱗が密集し厚くなっている。光を反射するメタリックな体は流線型で無駄がなく、早く泳ぐ事に特化している。『私、マグロっぽい』そう思うと嬉しさがこみ上げてきた。

私は小さな頃、水族館で夢中になってマグロを見ていた。『なんでそんなつまらない魚』そう母に言われて『そうなんだ』と思い急に恥ずかしくなった事を思い出す。ずいぶんと時間がかかったけれど『でも、やっぱり一番好きだな。頑丈そうで美しい、それに美味しいしね』そう思う自分を認めるとより早く泳げるようになった気がした。

駅前の時計を確認するともう午前４時を過ぎていた。そろそろ帰るべきだろう、と思いターミナル駅を後にした。自宅まであと半分といった距離になった頃、大通り沿いの公園の入り口で赤ちゃんをあやしている母親が視界に入った。

赤ちゃんの泣き声は車の音にかき消されるだろうし、目の前には交番があるので他の場所よりは安全だ。傍のマンションの住人だろうか、母親はベンチにも座らず立ったまま赤ちゃんを優しくゆすり続けている。

すれ違い様に「だいじょうぶ、だいじょうぶ、大好きよ。おねがい、おねがい、泣かないで」そう赤ちゃんに話しかけている声が聞こえた。今にも泣き出しそうな声だった。

今、聞いた言葉が必要なのは母親の方なのではないだろうか…。

「赤ちゃん、可愛いですね」私は声をかけていた。母親は驚いたように顔を上げた後、力な

い笑顔を私に向けた。「でも、大変ですよね。寒いので帰ったらしっかり温まってくださいね」私は母親の笑顔に答えるようにして、できるかぎりの柔らかな笑顔を返した。それだけ伝えるとその場から離れた。

母子から離れると、昔に聴いた覚えのある曲が頭の中でゆったりと響き出す。しかし何の曲なのか思い出せない。揺蕩うようなその旋律は私の中で響き続けている波の音と交じり合う。私もあんな風に思いを注がれた事があったのだろうか…。

家に帰るまでの間、その旋律に母子が魚となり穏やかな波に揺られる様子を思い描いた。海の中なら声も響かず、涙は塩水に綺麗に溶けてしまうだろう。母も子も波に揺られてたくさん眠れるだろうか。赤ちゃんの笑う声が聞こえ、母親の張り詰めた声は穏やかな寝息へと変わる。あの母子も魚になる事ができたらいいのに、そんな風に私は考えていた。

自宅に戻ると朝食の準備をした。いつもは彼が起きて来るまで待つのだが、今朝はどうしても、そうしたいと思えなかった。私は彼がすぐに温めなおして食べれるように準備をすませた後、外がとても寒かった事を思い出し、ネックウォーマーをその傍へ置いた。

全ての支度をすませイヤフォンを耳に居室兼寝室へ入る。音楽は聴いていなかったがそうする必要があった。彼にはいびきが気になる時はイヤフォンで音楽を聴きながら寝る事にすると話していたからだった。

セミダブルのベッドは二人で眠るのには狭い。できるだけ彼から離れてそっと身体を納め、目をつむる。数十分後、彼が目を覚ましてベッドから抜け出す気配を感じた。台所で何かを言っている声が聞こえ、その後ドアが開いたのを光で感じる。イヤフォン越しにくぐもった彼の声が聞こえた。私が起きていない事に腹をたてて文句を言っているのだろう。申し訳ないな、と思いながらも諦めてくれるよう願う。暫くすると大きな音をたててドアが閉まった、私はびくりと体を震わせる。今夜帰ってきたらイヤフォンは禁止にされそうだなと思った。

それから1時間程経ち、玄関のドアが閉まる音が聞こえる。彼は仕事に出かけたようだ。硬直気味の身体を伸ばし、ごろりと寝返りをうつ。カーテン越しに鈍い光を感じる。私は布団の隙間から木々の落とす影が移動してゆくのを眺め続けた。

カーテンのすぐ外には室外機がある。そこだけはどんな季節でも、何時になろうとも、日が当たらない。この部屋自体も一階で窓の外に背の高い植栽があるせいで年中、あまり日は入らない。それでも私は緑の落とす影と、風に混じる香りが好きでこの部屋に住む事にした。冷たい日陰で室外機は小さなモーター音を響かせている。

彼は私の話に違和感を感じている様子は無かった。もしかしたら私の話など殆ど聞いていなかったのかもしれない。

しかし事実もある。私の可愛い猫は、日中にしか姿を現さない。私の世界にしか存在しないその猫は、彼の姿に怯えているようだった。今は私の足元で眠っている。私の代わりにその白い猫はすやすやと眠ってくれるのだ。その姿を見ているといつでも穏やかで温かな気持ちになれた。私の可愛い白い猫。私だけの猫。

部屋が一段と薄暗くなり、耳をすませた。すると雨が木々の葉に降り注ぐ柔らかな音と共に、雨垂れの音も聞こえてきた。雨どいを伝う水の音、蛇口から零れた雫もそれに加わる。家中に水達が奏でる音が広がると、それは一つの旋律へと重なってゆく。今朝、母子を見た時にも聞こえた曲だ。ピアノを習っていた私はこの曲を小さな頃から知っていた。

揺蕩うようなピアノの旋律、小さな頃はこの曲を水のようだと感じていた。だからタイトルの意味が夢想だと知った時、子供だった私の心は素直に頷かなかった。そう、この曲の名は『トロイメライ』。

でも今なら解る気がする。この曲はただの夢想ではない、大人の想う夢だったのだ。

足元の猫は起き上がり、こちらを見ていた。小さな声で一鳴きすると少し開いていたドアをすり抜けてダイニングへと姿を消した。私が猫の後を追おうとベッドから起き上がったその時『ちゃぽん』と水の音がした。それは魚が水に跳ねた時のような音だった。

だんだんと雨脚が強くなってきたようで、薄暗いダイニングでは窓を伝う雨の雫が水の筋を造り、その影が幾筋もゆらめいていた。ダイニングキッチン全体がゆらめく影に覆われると、まるで水の中にいるようだった。

トロイメライの旋律はより輪郭を強め、私の中に鳴り響く。するとまた猫の声がした。私を呼んでいる、確かにそう感じた。私は昨夜のようにコートを掴むとそれをはおり、真っ暗

な玄関のドアを開けた。
外は雨の午後に相応しいぼんやりとした明るさと、水の匂いに満ちている。雨に濡れながら大通りに出る頃には、私は魚の心をすっかり取り戻していた。自分の住んでいたマンションを振り返る。もうあそこに戻る事はやめようと思った。

傍らの白い猫はまた『ちゃぽん』と水音を響かせた。水に潜るようにして、くるりと回転すると美しい尾びれを私に見せる。私を、私のまま愛しんでくれる人はどこかにいるのだろうか…。まずは私が思いを注げる人を探すべきなのだろう。
揺蕩うメロディに合わせハミングする。魚の心が赴くままに、私は静かに泳ぎ出した。